京・近江の手仕事 ⑯

京和傘

内に秘めた末広がりの美

和傘と洋傘の違いは素材だけではない。通常8本の骨の張力で生地を押し広げる洋傘に対し、和傘は30～70本の竹骨で和紙を支えている。この構造のおかげで、広げると丸みのある洋傘とは違い、直線的な末広がりのシルエットに美が宿る。

和傘づくりは複雑で100を超す工程があり、骨師、張り師らの分業制で成り立つ。京和傘を製造・販売している「日吉屋」（京都市上京区百々町）は竹製の骨、骨を束ねる円筒形部品「ろくろ」、和紙といった材料を専門業者から取り寄せ、組み立てるところから作業を始める。

まず和紙を張る親骨を傘の頭頂部分の天ろくろに、親骨を内側から支える小骨を手元の下ろくろにそれぞれつなぐ。「下事」と言う工程で、ろくろの割れ目に骨を挟み、糸を巻いて固定する。次は、親骨の間隔を均等にする「まくわり」。和傘は骨数が多く、一本一本の歪み癖を読む力が求められる。「ここで少しでも歪みがあると傘がたためなくなるし、和紙を張ってもたるみが出ます。何年やっても難しい。気を遣う部分です」と日吉屋で職人歴10年の竹澤幸代さん（31）。

和紙を張る作業は、まず外周部分の「軒紙」から。広げた状態の形を決め、外周を強化する。次に小骨を受け止めている中央部分の「中置き張り」、全体を覆う「胴張り」と続く。和紙は繊維が細かい越前（福井県）、五箇山（富山県）を使う。

胴紙を張り終えると、天ろくろを細長い和紙で巻いて頭頂部分を強化し、内側の小骨の下ろくろ部分にも和紙を張る。親骨に沿って和紙に折り目を付ける「姿付け」で整え、頭頂部を「頭包」と呼ぶ和紙で再び包む。最後に、防水効果のある亜麻仁油を胴紙に塗り、天日で干す。

竹澤さんはこの一連の作業を一人でこなす。「和傘は畳んだ時に一本の竹のように細くなるのが理想です。それと、傘を差した時の内側の美しさも和傘ならでは。小骨に色糸を張り巡らす飾り糸もあります。誰よりも差す人が楽しめるのがいい」と魅力を語る。

京都市内には明治期、100軒を超す京和傘の製造元があったというが、需要減から次々に店を畳んだ。西堀耕太郎さん（42）が29歳で婿入りして日吉屋五代目を継いだ時は、最後の1軒になっていた。「こんな素晴らしいものを絶やすべきでない」との思いで傘づくりの手ほどきを受け、需要開拓に国内外を奔走する。

茶道家元の野点傘や祇園祭、葵祭など祭事用傘の修理に加え、和傘の技術を応用した照明器具を開発。片手で傘を畳める機能と竹骨の幾何学模様を取り入れた。

「今は照明器具の注文の方が多くなっています。『伝統は革新の連続』の信念のもと、今の時代が求めるものをつくり続けたい。いくら美しくて素晴らしくても、使われなければ、残れないから」。未来へ向かう手仕事の道は見えている。

（文・柳原弘行　写真・吉田清貴）

＝次回は12月12日掲載の予定

和傘は30本以上の骨が和紙を支える構造に特徴がある（京都市上京区、日吉屋）

和傘の技術を応用した照明器具。竹骨の幾何学模様が美しい

花と緑のワンダーランド

内藤育子 ⑫

鉢物も限られた観賞期間

鉢物を枯らしてしまい、自分は植物を育てる才能がないと思ったことがありませんか。はたまた、花が終わって葉だけになった鉢植えも季節が巡れば、また元の姿に戻ると期待したくなるものです。

しかし、鉢物にも観賞期間があることをご存じでしょうか。花の王国オランダでは、「鉢物は切り花より少し長持ちする植物」という認識もあるようです。

鉢物は買ってきた時の姿が最も美しいものです。生産者がそれぞれの花に最適な施設と環境を整え、プロの技で生産しているからです。

例えば、クリスマスの定番のポインセチア。本来は温暖な環境を好みますが、冬に向けて温度と照明をコントロールし、苞と呼ばれる部分を鮮赤に色付けます。観賞期間が終わると緑の葉だけになって、家庭で再び色付けするのは一筋縄ではいきません。

弊社の窓際に数年前から置いてあるコチョウランも、気まぐれに開花しますが、花並びがイマイチで、きれいな売り物のようにはなりません。

グリーンフィンガー（園芸の才能）をお持ちの方なら上手に育てられるでしょう。しかし、枯らしてしまっても、ご自身を責める必要はありません。必ずしも管理が悪いわけではなく、環境が植物に合っていなかったか、もともとそれほど寿命を長く想定せずに作られた可能性もあるからです。観賞期間中に十分楽しみ、もし枯れたら、ぜひまた新しい植物を迎え入れてください。

（大田花き花の生活研究所主任研究員）

温室で栽培される冬の定番ポインセチア（ドイツ、EPA＝時事）